九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『ヘンリー五世』における捕虜殺害命令

徳見，道夫
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5435

出版情報：言語文化論究. 15, pp.115-122, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

『ヘンリー五世』における捕虜殺害命令

徳 見 道 夫

I

Andrew Gurrは，著者不明の*The Famous Victories of Henry the Fifth*(1598年，以下『ヘンリー五世の著名な勝利』と記す)と『ヘンリー五世』とを比較して，シェイクスピアが前者の劇にない出来事を三つ付け加えていると指摘し，それらを列挙している。[1] 一つは，サウサンプトンでのケンブリッジらの陰謀発覚事件であり，二つ目はハーフルー攻撃であり，三つ目はフランス人捕虜殺害命令である。陰謀発覚事件は，ヘンリーの人間的な面を強調するとともに，フランス遠征への吉兆として納得できるし，ハーフルー市民に対するヘンリーの慈悲深い対応は，彼の王としての資質を遺憾なく表現する絶好の場であろう。だが，捕虜殺害命令はヘンリーの陰険な策略家としてのイメージを観客に植え付ける働きをしている。すなわち，イギリスの救世主としての作品全体におけるヘンリーのイメージを，捕虜殺害は台無しにしているわけである。何故シェイクスピアはヘンリーにこのような命令を布告させたのであろうか。小論では，ヘンリーの捕虜殺害命令に焦点をあてて，『ヘンリー五世』に内在するカルチャーの問題を再考察してみたい。

ハーフルー攻撃におけるヘンリーの市民に対する慈悲深い対応は，彼の脅迫的な演説とは対照的であり，シェイクスピアが材源として用いたエドワード・ホールの*The Union of the Two Noble and Illustre Families of Lancaster and York*(1548年)とラファエル・ホリンシェッドの*The Chronicles of England, Scotland and Ireland* (1587年，以下『年代記』と略す)が，イギリス軍の略奪を明確に表現しているにも拘わらず，シェイクスピアはこの場のヘンリーを慈悲深い王として描いている。[2] シェイクスピアはハーフルー攻撃でのヘンリーに対して慎重な配慮を見せているが，『ヘンリー五世の著名な勝利』の中には描かれていない捕虜殺害命令を，『ヘンリー五世』の中でヘンリーにはっきりと宣告させているのである。Gary Taylor はフォルスタッフ追放と捕虜殺害をヘンリーが冷血漢である証拠として挙げて，そのような冷血な行為を平然と行なう人物のみがアジンコートでの勝利を得ることができると論じているが，[3] フォルスタッフの追放は『ヘンリー五世』という作品の性格上止むを得ないことであり，もし強烈な個性を持つフォルスタッフをこの作品に登場させると，ヘンリーの王としての資質を十分に描くことができなかったことは間違いないであろう。Taylor のヘンリー観は冷血な戦略家ということになろうが，それでは何故アジンコートの戦いの時，シェイクスピアはヘンリーの巧緻な戦略を省略しているのか，ということが説明できなくなる。ヘンリーを冷徹な戦術家・策略家としてシェイクスピアが表現しようと思えば，『ヘンリー五世の著名な勝利』や『年代記』と同じように，アジンコートでの戦術も詳細に描くはずである。シェイクスピアは『ヘンリー五世』を書く時，

参考にした材源から適当に取捨選択をしているが，舞台上での捕虜殺害の明確な指示は，シェイクスピアの作品全体の創作意図とは不協和音を醸しているような気がする。1989年に封切られたケネス・ブラナーの映画『ヘンリー五世』では，ヘンリーはいたいけな少年がフランス軍によって殺害されたことに怒って，捕虜殺害命令を発したように描かれているが，シェイクスピアの作品ではガワーがその件に触れるだけで，[4] ヘンリーは戦力再増強に利用される捕虜をひたすら恐れているのである。

さらに Taylor は，捕虜虐殺を舞台上で演じるべきであり，シェイクスピアもそれを期待していたと論じているが，[5] アーデン版の『ヘンリー五世』を編纂した T. W. Craik は，その演出に反対している。彼はヘンリーの捕虜殺害命令に関して，

> But 'Give the word through' implies that the killing happens off stage, as does Q's version of I.37 ('Bid euerie souldier kill his prisoner').

と注を施し，捕虜虐殺が舞台上で行なわれたものでないと結論づけている。[6] また Andrew Gurr も Taylor の意見に反論し，舞台上で捕虜を殺害したのではないと論じている。その証拠として，舞台を忠実に再現していると考えられている四折版には，ヘンリーが捕虜と一緒に登場するというト書きがないことを挙げている。[7] Taylor の主張するように，ヘンリーの部下が舞台上で捕虜虐殺を実行すれば，彼のイギリス再生の星というイメージが損なわれることは確実である。それは，旧教から新教へ宗旨変えしたためイタリアからイングランドに亡命したアルベリコ・ジェンティーリが，彼の著書『戦争法論』(1598年)の中で，ヘンリーの捕虜殺害を非難していることからも分かる。ジェンティーリはオックスフォード大学で国際法を教えていたヨーロッパに響いた碩学であるから，1590年代のヨーロッパの思想界でも捕虜殺害は残虐な行為であると認識されていたことは間違いないであろう。しかし，ジェンティーリの考えとは反対の立場を表明している当時の著述家もいる。シェイクスピアと親交のあったストラットフォードに住んでいるリチャード・フィールドは，1599年にリチャード・クロンプトンの『大度の館』(1599年，*Mansion of Magnanimitie*)を印刷しているが，シェイクスピアとフィールドとの親交を考慮に入れれば，シェイクスピアがこの本を読んでいることはほぼ間違いないと思われる。クロンプトンは彼の著書の中で，ヘンリーの行為は仕方ないものだと断定している。その理由は，①そうしなければヘンリーは多くの勇敢な兵士を失うことになる，②イギリス軍の数が圧倒的に少ないこと，③イギリス兵にとってフランスは異国の地であること，④捕虜がフランス軍と合流して勢力を増大させること等を挙げている。シェイクスピアはこの本からもっとも大きな影響を受けたのかもしれないが，それでも捕虜殺害はヘンリーの作品全体におけるイメージとはほど遠い。[8]

それでは，ヘンリーの捕虜殺害命令は『年代記』を単に模倣したものと解釈できるであろうか。『年代記』では，ヘンリーは「日頃の柔和さとは反対に」(contrarie to his accustomed gentleness)，捕虜殺害の命令を下したと書かれている。『年代記』の記述を見てみよう。

> When this dolorous decree, and pitifull proclamation was pronounced, pitie it was to see how some Frenchmen were suddenlie sticked with daggers, some were brained

with pollaxes, some slaine with malls, other had their throats cut, and some their bellies panched, so that in effect, having respect to the great number, few prisoners were saved.[9)]

『年代記』には“this dolorous decree, and pitifull proclamation”と書かれており，作者は暗にヘンリーの命令を非難しているようである。ところが，シェイクスピアの『ヘンリー五世』では，このような残酷な命令を下したヘンリーをガワーが，“Oh, ‘tis a gallant king”(IV. vii. 8)と賞賛しているのである。シェイクスピアのヘンリーへの視点は材源からも離れ，ヘンリーがそのような残虐な命令を発しているにも拘わらず，ヘンリーを賞賛すべき王として描いていることは，極めて注目すべきことである。

II

シェイクスピアがヘンリーをことさら理想的な王として描いていないことは，4幕1場でヘンリーが変装して兵士と議論を戦わせる場面を，アジンコートの戦いの前に挿入していることからも分かる。また，父王ヘンリー四世が犯したリチャード二世殺害の罪も，彼の心に深く食い込んでおり，フランス軍との戦いの最中にはその罪を忘れていてほしい，と神に切実に願う。

Not today, O Lord,
Oh, not today, think not upon the fault
My father made in compassing the crown. (IV. i. 266-8)

わずか二行の間に“not”を三回も使用しているヘンリーの台詞は，彼の切迫した心情を観客に余すところなく伝えている。このような人間的なヘンリーをシェイクスピアは描くことによって，等身大のヘンリー像を観客に与えようとしていることは間違いないように思われる。そのことから，捕虜虐殺命令を考えてみれば，ヘンリーの人間的側面(弱さ)を強調するために，捕虜殺害命令を発したとも理解できる。だが，4幕1場におけるヘンリーの人間的弱点は，観客にヘンリーの心情に同情するように仕向けるが，捕虜殺害命令は観客の心をヘンリーから引き離し，彼を冷静に観察する機会を与えるし，また観客の中には激しい反発を感じるものもあるであろう。シェイクスピアの材源を網羅的に取り上げている Geoffrey Bullough も，シェイクスピアが先行する劇とは対照的に，『ヘンリー五世』の中に捕虜殺害命令を挿入していることに触れ，

Yet unlike the earlier play, *Henry V* does not omit the killing of the French prisoners ordered after the illegal attack on the King's camp and baggage-train. That is, Shakespeare does not shirk mention of an episode which might seem to disprove Henry's humanity and mercy; more, he does not defend it in the usual manner.[10)]

と述べ，シェイクスピアがヘンリーの人間性を観客の前で貶めないように配慮していない

ことを不思議に思っている。Bullough がこの捕虜殺害命令をヘンリーの人間性（Henry's humanity and mercy）の否認に繋がると見ていることは重要なことである。シェイクスピアはヘンリーの人間性を否定してまで，このエピソード(捕虜殺害命令)を挿入する必要があったのであろうか，というのが観客や読者の心に浮かぶ率直な疑問である。この論文では，その解答を二つの側面から考え，その疑問に答えようとするものである。二つの側面とは，すなわち『ヘンリー五世』の中の女性性抹殺と『ヘンリー四世』におけるフォルスタッフを代表とする軽佻浮薄志向の押さえ込みである。

Ⅲ

Jean Howard と Phyllis Rackin の指摘を待つまでもなく，フランスは女性性の象徴として描かれている。[11] Katherine Eggert も，

> Even if the play does not erase all memory of the first tetralogy's female rule, it does succeed in erasing Elizabeth, first by shaping England as an entirely male dominant body with France as its female victim, then by eliminating Katherine of France as Elizabeth's female forebear.[12]

と論じて，イギリスは男性，フランスは女性として描かれていると断定している。ヘンリーがイギリスの支配体制を男性性に近づけるために，女性性を象徴するフランスとその捕虜を抹殺する必要があったのではないかと考えられる。男性性を象徴する戦争の最中に，女性性を象徴するフランスの捕虜を殺害することは，ヘンリーが恐れていたフランス兵力の増強以上の象徴的事象であると思われる。シェイクスピアがその事実を理解して，捕虜殺害をヘンリーに命じさせたかどうかは定かではないが，この劇を鑑賞する観客や読者にはそのような意味を持ってくる。そのため圧倒的な力を持って，観客はヘンリーが率いるイギリス軍に男性性を感じるようになる。シェイクスピアにとってヘンリーの人間性あるいは彼と観客との共感の確立より，国家としてのイギリスの男性性を確立するほうがより急務であったのである。この視点から考えてみると，Gary Taylor が論じているように，捕虜殺害命令とフォルスタッフ追放を同列の事象として捉え，ヘンリーによるフォルスタッフ追放は彼の男性性確立に必要な措置であったことが納得できるであろう。 何故なら，Peter S. Donaldson も認めているように，ケネス・ブラナーは映画『ヘンリー五世』の中で，フォルスタッフを "a motherly, potentially engulfing figure"[13] と表現しているからである。この作品では，フォルスタッフとある意味で対照的な登場人物はエクセターであるが，彼はヘンリーにとって男性的なモデルとして存在・行動している。ブラナーの映画の中でフランス国王へ使者に立つエクセターの描き方を見れば，彼がイギリスの男性性を象徴していることは間違いないように思われる。『ヘンリー五世』の冒頭で，女性性の象徴であるフォルスタッフは排除されるが，フランス軍の捕虜を殺害することは，イギリスから女性性を排除し，ヘンリーやエクセターを中心とした男性的国家を建立するイギリス国家の決意の象徴であろう。

だが，ヘンリーはこの劇の最後に女性性の象徴であるフランス王女キャサリンに求婚す

る。男性的国家だけでは，国家の運営が上手く行かないことをヘンリーが認識したことが原因であろう。『ヘンリー五世』の作品中で，ウェールズ人，スコットランド人，アイルランド人の兵士がイングランド軍に入り込み，結局は他人種が混交したほうがよりうまく国家が運営できることが証明されているように，男性性と女性性との結合で国家は安泰が保たれることを，ヘンリーは認識したと考えても間違いないであろう。Christopher Highley は，「他者」の問題に焦点をあて，この間の事情を次のように要約している。

> Henry's French campaign began as a national crusade to highlight and differentiate an essential Englishness from its Others, but it ends in the blurring of identities whereby ... and with the prospect of the mongrel and weak Henry VI ascending the throne.[14)]

国家の運営には女性性や他者の存在は不可欠のものである。フランスという異国で戦争を遂行したヘンリーは，その事実を実感したことであろう。女性性排除からこの劇は始まったが(フォルスタッフは死に，ピストルの妻はロンドンに残る)，最後にはその女性性(最初の女性性と同質のものではないが)を吸収することでイギリス国家はより安泰の方向へ向かうのである。

Ⅳ

David J. Baker は，『ヘンリー五世』がイギリスの植民地政策の演劇的表現であると指摘しているが，[15)] これまで辿ってきた論述から言えば，ヘンリーによるフランス軍捕虜殺害命令は，植民地の住民すなわち他者の虐殺と繋がる事象とも考えられるであろう。男性と女性との権力関係を，本国と殖民地との力関係に置き換えて，植民地の住民の生命や権利を蹂躙することは考えられることである。また『ヘンリー五世』5幕のコーラスは，エセックスのアイルランド遠征を華々しく語っているが(V. 29-31)，Nicholas Canny も認めているように，[16)] そのアイルランドでのイングランド人とアイルランド人との敵対感情は確実に存在していた。『ヘンリー四世』1部ではウェールズの女性がイギリス軍兵士の死体に与えた残酷さが描かれているが，[17)] これもイングランドを上位に見てウェールズ人を劣った，あるいは「外部」の人間と見た発想であろう。劣った人間や「外部」の人間と残酷さはよく結び付けて考えられ，自国の人間の暴力は勇気の結果であり賞賛の対象となることは常識である。ヘンリーがフランス人捕虜殺害を命じた背景には，イングランドを上位と考えた「他者」である下位民族への抹殺の意思が見て取れる。シェイクスピアはそのような当時の発想に気付かずに，無意識の内にヘンリーに捕虜殺害命令をさせたのかもしれないとも考えられるが，おそらく彼は観客も自分の発想法と同じであると高を括っていたのであろう。海外へ勢力を伸張しつつあった16世紀末のカルチャーの深層部に宿るイギリス人特有の発想が，シェイクスピアに捕虜殺害を命じるヘンリーを描かせたとも考えられる。この劇はイギリスが戦争の危機にさらされた時によく上演されているのであるが，16世紀末の特有の自国中心的な発想でも，イギリス人を勇気付けてくれるから，そのような事象が起きているのであろう。ローレンス・オリビエはイギリスがヒットラーの空襲を受けていた時に，『ヘンリー五世』の映画を撮影していたのである。

『ヘンリー四世』１部，２部と『ヘンリー五世』とを比較してみると，興味深い事実が明らかになってくる。それは，『ヘンリー四世』では喜劇的な登場人物は死なないが，『ヘンリー五世』ではほとんど死んでいることである。この事実を視野に入れて考えてみると，アジンコートの戦いにおけるヘンリーの捕虜殺害命令は，この作品におけるコミカルな部分の抹殺に通じるかもしれない。Taylor は『ヘンリー四世』に登場するフォルスタッフの代わりが『ヘンリー五世』ではフルエレンであると論じているが，[18] 前にも述べたように，フォルスタッフの代わりはエクセターであるとも考えることができる。『ヘンリー四世』ではフォルスタッフがヘンリーの指導者であったが，『ヘンリー五世』ではエクセターがその代わりをしているように思える。男らしく堂々としたエクセターは，ケネス・ブラナーの映画ではとりわけ印象的であり，Peter S. Donaldson はブラナーの映画『ヘンリー五世』でのエクセターを次のように記述している。

> In a number of these key scenes, the duke of Exeter, played by Brian Blessed, replaces Falstaff as the king's mentor and companion. He is massive, genial, and very attached to the king. As with Falstaff, there is a touch of childhood glamour about him, though the underlying fantasy is that of unfailing fatherly *protection*, rather than maternal merger. Henry draws strength from Exeter, often looking to him for approval and support in times of decision or crisis.[19]

フォルスタッフではなくエクセターが『ヘンリー五世』という演劇の基調低音を構成している。フルエレンはこの劇の重要な登場人物ではなく，彼の表現する喜劇的要素は劇の背景へと押しやられているのである。ピストルとフルエレンとの「ネギ論争」はフォルスタッフが引き起こす笑いとは異質のものである。

ピストルが捕虜にしたのは“Mr. Fer”(IV. iv. 21)であるが，この人物は明白に喜劇的登場人物である。観客の前に登場する捕虜は Mr. Fer だけであるので，フランスの捕虜の代表が彼であることは疑い得ない。その Mr. Fer が代表するフランスの捕虜を殺害する事実は，取りも直さず，『ヘンリー五世』内部のコミカルな面の抹殺と言っても，それほど的外れなことではないであろう。Peter Corbin と Douglas Sedge は，『ヘンリー五世』の種本である『ヘンリー五世の著名は勝利』の疑いようもない業績は，

> ... its mingling of clowns and conquest at a time when 'heroical histories' contained few examples of low-life humour.[20]

と定義しているが，この路線をシェイクスピアは『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』で踏襲したと思われる。だが後者の劇ではフォルスタッフは死に，ピストルとともにフランス遠征に参加したバードルフは，教会からキリスト磔刑の銘板(“a pax”，III. vii. 14)を盗んだ罪で処刑されてしまう。『年代記』では名もない兵士が教会から“pix”[21] を盗んだ罪で処刑されたと記述されているが，シェイクスピアがこの無名の兵士の代わりにバードルフにしたのは，しかも“pix”よりもっと価値の低い“pax”にしたのは，『ヘンリー四世』で大らかに表現されていた喜劇的要素を抹殺する意図があったからであろう。ピストルと

フルエレンがこの劇でコミカルな面を引き受けていることは間違いないが，ピストルにはフォルスタッフと一緒にいた時の輝きはないし，フルエレンはヘンリーへの賞賛が主な役目である。『ヘンリー五世』におけるコミカルな面は，ヘンリーとこの劇の雰囲気(エクセターに代表される)によって，フランス捕虜虐殺のように窒息させられたようである。この後シェイクスピアは史劇を離れ，悲劇の時代に突入するが，その準備としてコミカルな部分を抹殺していったのであろう。その証拠に，ほとんど同じ年に書かれた『ジュリアス・シーザー』には喜劇的な要素は皆無であることが挙げられる。『ハムレット』の苦渋に満ちた笑いはこれからも存在するが，フォルスタッフの高らかな笑いはシェイクスピアの劇から完全に消えてしまった。

注

1) Andrew Gurr (ed.), *King Henry V* (Cambridge U. P., 1992), p.230.
2) Herschel Baker, "Introduction to *Henry V*," in G. Blakemore Evans (ed.), *The Riverside Shakespeare*, 2nd edition (Houghton Mifflin Company, 1997), p.974を参照のこと。
3) Gary Taylor (ed.), *Henry V* (Oxford U. P., 1982), p.31.
4) 'Tis certain. There's not a boy left alive, and the cowardly rascals that ran from the battle ha' done this slaughter. Besides, they have burned and carried away all that was in the king's tent, wherefore the king most worthily hath caused every soldier to cut his prisoner's throat. (IV. vii. 4-8)
以下『ヘンリー五世』の引用は, Andrew Gurr (ed.), *King Henry V* (Cambridge U. P., 1992) からのものである。
5) Gary Taylor, p.243.
6) T. W. Craik (ed.), *King Henry V* (Routledge, 1995), p.309.
7) Andrew Gurr, p.177.
8) Andrew Gurr, p.28を参照のこと。
9) Geoffrey Bullough (ed.), *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol.4 (Routledge and Kegan Paul, 1962), p.397.
10) Geoffrey Bullough, p.364.
11) Jean E. Howard and Phyllis Rackin, *Engendering a Nation—A feminist account of shakespeare's english histories* (Routledge, 1997), p.207.
12) Katherine Eggert, "Nostalgia and the not yet late Queen: Refusing Female Rule in *Henry V*," *ELH* 61 (1994), p.542.
13) Peter S. Donaldson, "Taking on Shakespeare: Kenneth Branagh's *Henry V*," *Shakespeare Quarterly* 42 (1991), p.66.
14) Christopher Highley, *Shakespeare, Spenser, and the Crisis in Ireland* (Cambridge U. P., 1997), pp.144-5.
15) David J. Baker, "'Wildehirissheman': Colonial Representation in Shakespeare's *Henry V*," *ELR* 22 (1992), p.41.
16) Nicholas P. Canny, "Identity Formation in Ireland: The Emergence of the Anglo-Irish,"

in Nicholas P. Canny and Anthony Pagden (eds.), *Colonial Identity in the Atlantic World, 1500-1800* (Princeton U. P., 1987), p.176.

17) Upon whose dead corpse there was such misuse,
Such beastly shameless transformation,
By those Welshwomen done, as may not be
Without much shame retold or spoken of. (I. i. 43-6)
Herbert Weil and Judith Weil (eds.), *The First Part of King Henry IV* (Cambridge U. P., 1997) からの引用。

18) Gary Taylor, p.70.

19) Peter S. Donaldson, p.68.

20) Peter Corbin and Douglas Sedge (eds.), *The Oldcastle controversy—"Sir John Oldcastle, Part I" and "The Famous Victories of Henry V"* (Manchester U. P., 1991), p.25.

21) Geoffrey Bullough, p.389.

Henry's Order to Kill Prisoners at the Battle of Agincourt

Michio Tokumi

Andrew Gurr points out that there are three events in Shakespeare's *Henry V* which do not exist in *The Famous Victories of Henry the Fifth* (1598): the revelation about the conspiracy to kill Henry at Southampton, Henry's assault on the town of Harfleur and his order to kill the captives at the Battle of Agincourt. Why did Shakespeare have Henry V issue a command to kill his prisoners? It surely shows one side of his atrocious character. In this paper, I argue that Shakespeare was influenced by the idea of his day—the expansion of his country abroad, which led him to give the order to kill prisoners at the battle. My second proposal in this paper is that Shakespeare wanted to kill laughter in his play. Following his historical plays he turned to writing tragedies, never to return to laughter of the kind found in Falstaff. Before embarking on writing his tragedies, he was determined to quell the comic elements in his plays. Therefore, after this play he could permit himself the cynical wit of *Hamlet* and other plays, but not the direct humour of earlier works.